

国文学研究資料館報

第26号

昭和61年 3月

展望と共同研究

『日吉山王利生記』の研究

田嶋 一夫

中世神道が中世文学と相互に係わり合い、文学・文化史、思想史の上で重要な意義を持つことは周知の事実であろう。とりわけ説話文学や軍記物に与えた影響は、極めて大きい。しかし現在までのところその本格的な研究は極めて遅れており、ごく少数の篤志家によって進められていると言うのが現状である。これまでは神道文献について、文学の側からも歴史の側からも、十分な取り組みがなされていなかったと言えよう。神道文献の調査研究によって重大な展望が開けるであろうことは、すでに伊藤正義氏や、阿部泰郎氏の研究が十分に方向性を与えている。しかも神道や神道史、思想史とは大きく異なった方法である。

山王神道は、天台仏教の場から成立してきたものとして、また中世から近世への転換の時期において、大きな役割を担った神道として、一層の究明が必要であろう。

山王関係資料の中でも、『日吉山王利生記』は、夙に群書類従に収録されていた。しかし本書に対するアプローチは、近藤喜博氏の成立論がある他は、文学の側からはほとんどなされず、主に美術史の方々が、本書の一部分として存在している、『山王靈験記絵巻』を対象とした研究を行っていたくらいである。こうした事情を考え、この共同研究では、『日吉山王利生記』を取上げ、基礎的な研究から着手し、諸本の調査・収集および校合を行うとともに、他の説話

文学との関係の究明などを進めている。

諸本の調査及び校合においては、これまでに、

内閣文庫本（享和三年沙門真超の写し）、

教林文庫本（早大図書館蔵「山王縁起」、天和二年沙門嚴覚の写し）、

叡山文庫本（書写年、書写者不明、近世後期の写し）、

妙法院本（「山王絵詞」古典文庫翻刻）、

教林文庫本（「日吉山王靈験記」二巻本、元禄七年

嚴覚の写し）、

を調査・収集した。所在を確認したもので入手していないものは、東京大学図書館蔵本一本（これも近く入手できるものと思う）を残すのみとなった。これまでの校合過程の中から見ると、内閣文庫本（白描の絵を残した整った本である）、叡山文庫本、群書類従

本が一グループをなしていること、教林文庫本が最も書写が古く、また他の本に先行する本と見られること、妙法院本は後の再編修本と見られること、等々の事が明らかになってきつつある。また教林文庫本の『日吉山王靈験記』は、抄本であり、成立はやや下るのではないかと思われる。（このような抄本の出現も中世文学研究の上では興味深いことである）。この課題については、今後より緻密な分析を進め、諸本間の関係を確実に把握できるようにし、本文をより正確に捉えらるるようになることと、本文の比較を山王絵巻類にまで及ぼし、絵巻類の成立過程も明らかにし、縁起、利生記、絵巻の三者を総合的に捉えらるるうにすることである。今後に残された課題も極めて多い。

他の中世文学との関連をめぐっては、読み進めるなかで、『発心集』、『三国伝記』、『源平盛衰

次一	『日吉山王利生記』の研究……田嶋 一夫……1	文献資料部事業報告……福田 秀一……9
一 目	共同研究（昭和60年度追加分・61年度）……2	研究情報部事業報告……博町 知弥……11
	海外資料の収集について……福田 秀一……3	整理閲覧部事業報告……本田 康雄……12
	第四回ヨーロッパ日本研究会議……	評議員会議・運営協議員会議等集報……13
	短期在外研修を終えて……小山 弘志……7	利用者へのお知らせ……15
	文庫紹介の酒田市立光丘文庫……白川 敬仁……8	昭和六十一年度春季学芸会開催一覧……16

記」等との係わりが明らかになり、本書と他の文学作品との係わりの意外な深さが明らかになった。この点は今後の研究の中でより一層明らかにしたいものである。

山王神道の実態と文学との係わりを追及していくなかで、『日吉山王利生記』はまことに適切な作品であったと思う。本書を文学研究の場で解剖し、文学史の中に位置づけていく作業は今後の課題である。

山王神道に関しては、この他の資料の調査研究の課題が山積している。『群書類従』に、『耀天記』『厳神鈔』、『日吉本記』等がすでに収録されているが、これらはごく僅かな資料である。この他に、例えば叡山文庫に寄託されている寺々の目録を見ても大量の山王関係の文献と思われるものがある。

しかし実態の調査は未だなされていないのである。また教林文庫にも相当数の文献が残されている。これについては一応の目録だけは整理した（『早大図書館蔵教林文庫目録稿』調査研究報告六号）。しかしその詳細については全く手がつけられていない。筆者の僅かな経験であるが、叡山文庫や史料編

纂所に写本が存在する『日吉社神道秘密記』などは、同一書名のもとに共通する内容と独自の部分の両面を持つている。諸本間の問題も簡単ではない。言うまでもなく資料一つ一つを丁寧に調査していく必要がある。

またこれらの資料の中には、実に多くの説話が含まれていることである。筆者が今回文献資料部の『調査研究報告』（第七号、六十二年三月刊予定）に翻刻紹介する『三院及び山王記』（教林文庫蔵、近世中期以降の写本）には、単に叡山関係の説話が見られるのではなく、熊野本地譚までが含まれている（尚、この資料の他に、『後門三院記』天和二年厳寛の写し、『日吉参社次第記』元禄十年恵洲の書写も併せて翻刻した）。未だ内容の分析は行っていないけれども、今後これらの資料を明らかにしていくことによって、中世文学研究、ことに説話文学の研究はより豊かに、また生き生きとした様相を見せるであろう。最初にも書いたように、神道・神道史、思想史学の立場からのみならず、文学研究者からの研究が必要なのである。

* 諸本の調査と収集の一部につ

昭和六十年年度共同研究

館報24号所報公募採択課題以外

(1)「久松本の」解題研究

久保田淳（東京大学文学部教授）

鈴木 淳（国学院大学日本文化研究所講師）

島中道則（当館客員・東京学芸大学助教授）

島原泰雄（当館助手）

福田秀一（当館教授）

三輪道胤（大阪府立大学総合科学部助教授）

(2) ロマンとしての落窪物語

フリッツ・フォス（当館客員教授）

（ライデン大学名誉教授）

小峯和明（当館助教授）

高橋 亨（当館客員・名古屋大学文学部助教授）

福田秀一（当館教授）

松本隆信（慶応義塾大学文学部教授）

三浦洋一（東京大学教養学部助教授）

百川敬仁（当館助教授）

昭和六十一年度共同研究

(1) 中世歌合の研究

井上宗雄（立教大学文学部教授）

福田秀一（当館教授）

佐藤恒雄（香川大学教育学部教授）

紙 宏行（文教大学女子短期大学部専任講師）

兼築信行（早稲田大学高等学院教諭）

山田洋嗣（立教大学大学院博士課程）

今井 明（早稲田大学大学院博士課程）

湯浅忠夫（学習院大学大学院博士課程）

(2) 江戸狂歌本の書誌的研究

浜田義一郎（大妻女子大学名誉教授）

石川俊一郎（慶応義塾大学大学院博士課程）

石川了（大妻女子大学文学部助教授）

宇田敏彦（戸板女子短期大学教授）

岡 雅彦（当館助教授）

小野尚志（当館助手）

柏谷宏紀（日本大学文学部教授）

延廣真治（東京大学教養学部助教授）

(3) 本朝文粹における顧文の研究

渡辺秀夫（信州大学文学部助教授）

小峯和明（当館助教授）

山崎 誠（広島女子大学文学部助教授）

森 正人（愛知県立大学文学部助教授）

佐藤道生（慶応義塾大学大学院博士課程）

(4) 江戸時代堂上和歌聞書の研究

島中道則（東京学芸大学助教授）

市古夏生（白百合女子大学文学部助教授）

揖斐 高（成蹊大学文学部助教授）

島原泰雄（当館助手）

清水素子（早稲田大学文学部研究科日文学専攻研究

鈴木健一（東京大学大学院人文科学科博士課程）

鈴木 淳（国学院大学日本文化研究所助教授）

林 達也（東京外国語大学助教授）

坂内泰子（東京大学大学院人文科学科博士課程）

古相正美（国学院大学大学院研究科博士課程）

(5) 三十六人集諸本の研究

平田喜信（横浜国立大学教授）

新藤協三（当館助教授）

藤田洋治（鶴岡工業高等専門学校講師）

加藤幸一（筑波大学大学院博士後期課程）

田辺俊一郎（大東文化大学大学院博士課程）

(6) 日本文学の特質

外国人研究員ほか

いては、この共同研究とは別途に行い、この中で活用したものであ

海外資料の収集について

——特にその問題点——

福田 秀一

ることを付記する。

(国文学研究資料館助教授)

一、はじめに

国文学研究資料館では、海外に伝存する日本文学関係資料についても、そのマイクロフィルムを入手して内外の研究者の利用に供することを心がけており、これを海外資料の収集、更に略して「海外収集」とも呼んでいる。

この「海外収集」は、国内各地に伝存する資料のマイクロ化すなわち「国内収集」に劣らず、いや原資料の実見が困難という点ではそれ以上に、緊急かつ重要とも考えられるが、現在のところ必ずしも順調に進んでいるとは言えないその実績は末尾(表1)の如くである。そこで今回は、その実情と問題点の一端を述べ、大方の御支援、御協力を望む次第である。

二、「収集」の手順

海外・国内を問わず収集(マイクロフィルム入手)手続の第一歩は、撮影希望書目の作成である。

撮影許可願ないし撮影依頼の公文書にそのリストを付して、所蔵者に

出願するのである。従ってそのリストには、撮影に当って出納に必要な書名・冊数・請求番号などが記されていなければならず、撮影経費や所要日数を見積るために丁数も記してあることが望ましい

(少くとも国内収集では、僅かの例外を除き、丁数も必須である)。

それでは、そうしたデータを入れた撮影出願リストをどうやって作るか、ということだが、国内に

関しては調査データから拾う。当館設立以来、毎年何十人かの「調査員」に地域的、専門的(但し、地域や文庫の事情によつては専門性を生かせないことも多い)に分担して頂いた調査の結果(原則として「調査カード」による報告)が、先ずここで役に立つ。

すなわち、収集に先立つて「調査」の段階が必要なのであるが、

それならば調査対象すなわちその

蔵書を調査させて頂く文庫・コレク

ションはどうやって選び出すかという

と、われわれが入手した多くの情報

が基になる。新旧多くの蔵書目録類はその最も有力で便利なものであるが、目録が公刊されていない

くとも、どこの何文庫あるいは何

寺・何家等にこういった傾向・内容の蔵書があるとか、あるらしい

といった情報を、われわれは直接の通報や各種のルートから知ると

それを検討して、必要な場合はその情報を確かめる(資料の有無・傾向・量や当館としての調査収集

の可能性・時期などについて)ための「予備調査」を行うことも、

しばしばである。

以上、収集の第一歩とそれに先立つ手段として、

1、資料の所在に関する情報の入手

2、文庫へ出向いての調査

3、撮影希望書目の作成と提出

の各段階が必須であることを述べた。例外として2を省略するケースが稀にあるけれども、その場合も蔵書目録等によつて撮影希望書目を作成・提出してはあ

三、海外収集の隘路

ところが海外収集の場合には、

右の2は従来ほとんど不可能であった。1も今のところ甚だ不満足である。従つて3にたどりつくこ

とは困難と言わざるを得ない。海外収集が思うように進まない最大の原因は、これにある。

1、「海外調査」の困難

この中で、右に2として挙げた「海外調査」は、当館としては創設直後から予算を要求しているが、未だに認められていない。その経緯は端折るが、いずれにしても予算事情の窮屈な昨今は新しい費目を認められるのは容易でなく、去る五十二年度に海外資料の収集費だけが(同時に要求していた調査費用を切り捨てて)認められたことをもつて、半ばよしとしなければならまい。

調査予算がつかないため代替措置として近年実行しているのが、文部省科学研究費補助金(海外学術調査)(略称「海外科研」)への応募である。その一部始終は長くするので省略して実績だけを記すと、五十七年度 フィールドワーク 以外も採択されることになりパークレイ三井本の調査を申

請したが不採択

五十八年度 カリフォルニア大学
パークレイ校の三井文庫本
調査(写本のリストアップ、
本館報第二二号参照)

五十九年度 パークレイ三井文
庫本の調査総括

国立台湾大学蔵旧台北帝大本
の調査(リストアップ)

六十年 同 右(リストアップ
の続き)

六十一年度 同 右 総括(申
請中)

という具合で、五十八年度調査の
パークレイ三井文庫の写本二八〇
〇余点は、翌年度に総括研究を行
う傍ら、『調査研究報告』第五号
(昭五九・三)に掲載の形で、簡略
ながら目録を作成することができ
た。五十九・六十年調査の台湾
大学蔵旧台北帝大本(今回はかつ
ての国語国文研究室本に限った)
についても、何らかの形でパーク
レイ三井本に準じた目録を作成し
て公表できたと思う(但し
そのためには先方と今後よく打
合せて諒解を得る必要があること
は言うまでもない)。

右のようにこの三年間、われわ
れは海外調査にも相当の力を入れ

てきたし、その努力は学界にも国
際交流にも有益であったと信ずる
が、その成果として目に見えるの
は、僅かに三文庫(それも各一部)
であり、世界的に何らかの調査が
望ましい文庫・コレクションの全
体(後掲表2参照)から見れば何十
分の一かに過ぎない。しかも当館
には海外調査ないし海外資料を専
従とするスタッフが居るわけでは
ないから、何週間か海外へ出張す
れば本人も周囲も、それだけ仕事
が溜り負担が増える。それ故、六
十二年度以降も海外収集のために
必要可能な調査について労は惜し
まないつもりであるけれども、実
際問題としてどの程度の日程と人
員が充てられるかは、その都度無
理のないところで決めねばならな
いと考える。六十年台湾調査に
おいて、当館(文献資料部)メン
バー七名に外から二氏(福岡女子
大の井上敏幸氏と新潟大の鈴木孝
庸氏)の応援を乞うたのもその解
決法模索の一つで、今後一層外部
の協力を仰ぐことになるであろう。

2、情報・目録の不足
海外と限らず「調査」は、本来
「収集」に役立てばよいというだ
けのものではあるまい。特に海外
のような再度訪問の困難な文庫に
ついては、ある程度の書誌を記録
することが望ましいには違いない。
ただ、今のところ前述のような事
情で、当館としてはそこまでの手
は回らないのが事実である。

一方逆に、収集出願のためなら
ば、特に海外に限っては、丁数は
不明でも出納が正確にできるリス
トを作ればよく、そのためには各
図書館・文庫の「目録」があれば
一応足りる。

ところがその「目録」が、あま
り刊行されていないのである。そ
れについては先般「朝日新聞」(昭
和六〇・一二・一三夕刊)にも訴
えたが、どうか和古書を有する海
外の図書館・文庫が一日も早くそ
の目録を作成・公開されるよう望
まざるを得ない。

更にまた、撮影出願書目選出の
資料としては、所蔵者側で作成し
た「目録」でなくとも、訪館訪書
した研究者の報告も、多分に役に
立つ。現にわれわれは、先年アメ
リカ議会図書館(坂西コレクション
の歌書等)や大英図書館(若干
の歌書等)への出願リストを、鈴
木知太郎氏が「語文」(日大)第
四十一輯(昭五一・七)に載せら

れた報告その他を基にして作るこ
とができたのであった。

三、おわりに

海外収集が進まない原因として
は、時に撮影経費の高いこと(特
にヨーロッパにそのケースがある)
や出願・回答といった事務手続に
対する各国の受取り方の相違、時
には用語の問題(回答が日本語か
英語で来るとは限らない)なども
あるが、最大のネックは右に縷説
した撮影希望書目を作るための資
料の不足である。われわれとして
は、海外収集出願のために各文庫
・コレクションの目録の入手に一
層気を配ると共に、それにある程
度代え得る最新の情報(各研究者
の調査報告から複写料金に至るま
で)をできるだけ多く手に入れた
く、この紙面を借りて大方の御支
援・御協力を乞う次第である。そ
のため、遺漏・不備を覚悟の上で
それらに関する手持ちの知識を、
(表2)に示して結びとする。

(文献資料部長)

〈表1〉 海外収集現状 (昭和六十一年一月末現在)

所蔵者名(順不同)(国名)	点数	年度	備考
議会図書館(アメリカ)	一〇	五七	歌書・奈良絵本等。本文参照
エール大学東アジア図書館(アメリカ)	一	五四	奈良絵本伊勢物語。館報第一六号参照
カリフォルニア大学バークレイ三井文庫(アメリカ)	五一	五九	海外科研よりの寄贈。
大英図書館(イギリス)	一一〇	五七	奈良絵本御伽草子類。研究者よりの寄贈
ケンブリッジ大学図書館(イギリス)	一一〇	五七	うつし物語・大和物語等。
チェスタービーティ図書館(アイルランド)	一一〇	五七	近世小説等
ルーテル大学ボッフム(西ドイツ)	三三	五八	奈良絵本。研究者よりの寄贈
国立図書館(フランス)	二二	四八	伊勢物語・語学・漢文学等
王立図書館(スウェーデン)	五〇	五八	奈良絵本。購入前に複写
ソウル大学校図書館(韓国)	五五	六〇	神道・歴史・和歌等。ノルデンシヨルドコレクションの中 古写本・古刊本等。同館よりの寄贈

〈表2〉 海外調査必要箇所一覧表

この表に挙げたのは、当館で調査・収集すべき資料を有すると当館が現在(昭和六十一年一月)までに直接間接知り得た所蔵機関の一覧表である。これ以外にも、当館でまだ所在の情報を得ていない公私の所蔵者が多数あると推測される。

所蔵機関名	点数(多きは略)	蔵書傾向・特色等	備考注1
(アメリカ)			
カリフォルニア大学バークレー三井文庫	写本二九〇 版本・複製等	広範囲	注2
同 ロスアンジェルス	若干	同右	
ミシガン大学	若干	写本(善本多し)	
シカゴ美術館	不明	写本・絵入本多し	
同 ライアーリンコレクション	一一五〇		
議会図書館	三五〇〇	質豊豊富	注3
スミソニアン研究所フリヤギャラリー	不明	絵本・絵巻・縁起等	
ニューヨーク市立図書館(ヘンサー)コレクション	六二五	絵本・絵入本(刊写)	目録(九八八)初版 一九八八増補版有
コロンビア大学東亜図書館	若干	主に版本	
ホストン美術館	数千点	古筆切・絵巻・浮世絵・版本等	
ハイドコレクション	一八〇	古写本・古版本	

所蔵機関名	点数(多きは略)	蔵書傾向・特色等	備考注1
ハーバード大学ホーファーコレクション	七〇〇	古写本・古筆切	
同 フォック美術館	不明	同右	
同 エンチン図書館	一五〇		
同 法律図書館	不明		
エール大学東亜図書館	三五〇	版本・地誌	
コーネル大学グリフスコレクション	二五〇	沖繩資料	一部目録有
ハワイ大学ホーレー文庫	不明	絵巻	
ホルルアカデミー・オブ・アーツ	不明		
(イギリス)			
大英図書館	一〇〇〇	古版本・古活字本・キリシタン版他	目録二冊(二八 九八・九〇)四有
オックスフォード大学図書館	不明	キリシタン版	
ケンブリッジ大学図書館(アストン)コレクション	二〇〇〇		目録作成中 注4
ロンドン大学SOAS	浮世絵三〇		目録(九七五) 有注5
(アイルランド)			
チェスタービーティ図書館	二〇九	奈良絵本豊富	目録(九七五)有
(フランス)			
パリ国立図書館(BN)東洋写本部	不明	絵本・絵入本他	
同 デュレーコレクション	四〇〇	絵本・絵入本・浮世草子	目録(九八〇)有
同 ルスエフ・スミスコレクション	二〇八	絵巻・絵入本・奈良絵本等	目録(九八七)有 注6
ギメー博物館	不明	絵本・絵入本他	
リール市立図書館	五〇〇冊以上	レオン・ド・ローニー旧蔵書	注7
(オランダ)			
ライデン民族博物館	不明		
アムステルダム国立博物館	不明	屏風・絵画等	目録(九八六)有 注8
(西ドイツ)			
西ベルリン国立図書館	写一〇〇 刊七〇〇	絵本・絵入本	目録(九八二)有

所蔵機関名	(ソ連)	立致多くは概略	蔵書傾向、特色等	備考
レニングラード東洋学研究所	七〇〇			目録六冊(一九三六六有)
レニングラード大学有精川宮文庫	三五〇〇			注13
(韓国)				注14
ソウル大学校図書館(旧京城帝大蔵書)	二〇〇〇以上		近世小説、狂歌関係は豊富	注15
国立中央図書館(旧朝鮮總督府蔵書)	不明		古活字本等	注16
韓國精神文化研究院	五〇〇		詩文、歴史等	注17
(台灣)				
台灣大学研究図書館(旧台北帝大蔵書)	多数		全載、特に近世作品	注18
国立中央図書館	不明		古写本、古刊本	
故宮博物院図書館(楊守敬旧蔵本等)	一〇〇		古写本、古刊本	善本目録 (一九八三有)
(中国)				
北京図書館	不明			

を別として、相互に多少の出入りと重複がある。なお、島居氏の『台湾大学所蔵近世芸文集一―四』(勉誠社、昭五六・一六〇、五は近刊の由)の解題も、各ジャンルについて有益である。

第四回ヨーロッパ日本研究会議

小山弘志

昨年九月二十三日より三日間、パリで開かれた第四回ヨーロッパ日本研究会議に出席した。この会議は三年毎に開催される。第二回（昭和五十四年）フィレンツェの時には福田秀一教授が招待講演者として参加した。

今回の会議の会長はコペンハーゲン大学のオロフ・リディン教授である。毎年のように来館され、昭和五十七年には当館の客員教授であった同教授より、会長として正式に、また個人として懇切に、参加を要請されたので、願ひ出て出張することになったのである。

会場はソルボンヌ。二十三日午前にリシュリュール講堂で開会式があり、その日の午後から二十五日夕方の閉会式まで、各教室で分科会が行われた。それは次の八つの分野である。①経済学・経済史 ②歴史・政治・国際関係論 ③科学史・技術史・医学史 ④言語学・語学教育 ⑤文学 ⑥宗教・哲学 ⑦社会学・教育・文化人類学 ⑧

演劇・音楽・美術。私は⑤文学の分科会に出席した。

会する者、リストによれば二十七か国より約三百人、内、日本人は在欧者を含めて四十名ぐらいか。分科会が主であるため、他の分野の知人との接触は、たびたび催されたレセプションの折などに、探し当てようと努めねばならない。ロンドン大学のオニール教授とは閉会式後の日本大使館広報文化センターの招宴で初めて会うことができた。同分野だけでも、同教授はずっと④の分科会に出ていたのことであった。

この会議には国際交流基金の援助がある。旧知の石綿敏雄（茨城大）・伊東俊太郎（東京大）・河竹登志夫（早稲田大）・佐伯彰一（中央大）の各教授などは招待講演者であった。また、交流基金に御勤務の高田宮殿下は開会式に臨席され、挨拶をなさった。

開会式では、コレージュ・ド・フランスのベルナル・フランク

教授（昭和五十五年度当館客員教授）の「立体的『仏像図鑑』としてのギメ コレクション」と題する特別講演があった。ギメ（一八三六―一九一八）の滞日中（一八七六―七七）の広汎な蒐集を基盤として、必ずしも宗派や時代に係わらず、広く民間信仰をも視野に入れた、卓抜した内容のものであった。

⑤文学の分科会はルール大学ボツフムのイルメラ・日地谷・キルシュネライトさん（この会議直後の昨年十月より一橋大学助教授に就任）の司会で進められた。出席

者はほぼ三十名。発表は、日・仏（各三）、西独・スウェーデン・ブルガリア（各二）など十二か国の研究者による十九、内、十二は近現代文学が対象である。金色夜叉と不如帰・坪内逍遙・森鷗外、吉野葛・佐多稲子・古井由吉と黒井千次・石牟礼道子・井上ひさし・森澄雄など、多彩であった。

佐伯教授の「日本文学の隠れた面」は小林秀雄などの「神道的メタリテイ」についての論、安藤元雄教授（明治大）は小野十三郎・吉岡実・入沢康夫などの現代詩について述べ、私の発表題目は「国



コレージュ・ド・フランスの図書室で



ソルボンヌの教室で

文学研究資料館の役割」である。閉会式ではリディン会長の挨拶と各分科会の成果の報告があり、次期会長をロンドン大学(LSE)のニッシュ教授と決め、三年後の再会を約して散会した。

短期在外研修を終えて 百川 敬仁

筆者は昨年の五月から十一月にかけて半年間、カナダのヴァンクーヴァを滞在地として在外研修を行なった。受け入れ先となった研究機関は、ブリティッシュ・コロンビア大学(UBC)であり、主たる研究テーマは、日本文学における異界の比較文学的研究というものであった。

この「日本文学における異界」という主題は、もともとは、国文学研究資料館の昭和五十八年度の共同研究「日本文学における「向う側」の発想」を契機として筆者の内部で形をとったもので、すなわち当年度の外国人研究員である鶴田欣也UBC教授の提案した「向う側」という概念に触発された所産であるが、考察を重ねるうち、「異界」は単に文学作品成立にかかわる問題にはとどまらぬことが

前段階を含め、会議全体の運営は事務局長を勤めたフランス国立高等研究院ロタムント教授の采配による。その尽力を多としたい。

(館長)

筆者にとって次第に明白となった。

もし現実の世界を広義におけるひとつの読解すべきテクストと考えるなら、私たちは異界を、テクストの「外部」という問題に関わる概念として捉え直すことが可能になる。そうなれば、事柄はただちに、「日本」というテクストに相渉るものとならざるを得ない。なぜなら、日本人である私(たち)にとって、テクストとは否応なく日本の現実にはかならず、従って、「外部」異界の問題を考えることは、そのまま、異文化の存在を媒介とする「日本」テクスト」批評の試みとなるべきものだからである。

在外研修の機会がめぐって来たのは、丁度こうした折だった。筆者にとつては、鶴田教授との共同研究の継続という点でも、また、

異界という主題をさらに掘り下げ

て考えるためにも、まさに願って

もない成り行きであった訳である。

しかし、実際にカナダで研究を始め、日本に関心を持つ学生や社

会人と話し合うようになると、当初の目論見を修正する必要がある

ことが、すぐにはつきりした。程度の差こそあれオリエンタリズム

から自由では有り得ない彼等と、これも「日本」というブラックホ

ールのような「内部」にいてしかもその事実には自覚的であることが

難しい私(たち)との会話は、どうしても交わらない平行線のような

なもどかしさを解消できないのである。勿論、これを、英会話ある

いは日本語会話における不自由さに掃すことは出来ない。むしろ、

そうした語学的な次元を往々にして強調し過ぎる傾向は、本質的な

難問を陰蔽しようとする無意識の力が日本という「内部」で働いて

いることの表われと見なしてもよいほどである。

問題が語学以前にあることは分り切っている。私(たち)と彼等の言葉そのものが、乖離を孕んでいるのであり、それは同時に、言葉の座となるお互いの人格の差異

であり、また、それと相關的に、

社会の差異である。要するに相互に内閉する「構造」が問題なので

ある。とすれば、この問題に対して何らかの見通しを持つことが先

決だとして、では、どうやって循環する構造にくさびを打ち込むか。

筆者がとつた方法は、残念ながら、ごく常識的なものにはすぎない。

出来る限り母語から遠ざかり、その土地の言葉の中で生活すること。そうする中で母語が異なる言

語によって侵蝕されて行く感覚を捉え、その感覚を介して自分自身の内に亀裂を作り出す。そしてこ

の亀裂の内部を覗き込む、という寸法だった。

短期在外研修で認められた六ヶ月という時間は、こうした試みを徹底して行なうには、やはり少々短

かすぎる。とはいえ筆者は実に多くの事をこの間に学び、その一端は機会を得てUBC・ハーバード・

トロントの各大学における講演あるいは報告という形でまとめるこ

とが出来た。これもひとえに鶴田教授を始めとして多くの方々の御

援助の賜物であり、改めて、一層の研鑽の責任を感じている次第である。

(研究情報部 助教)

文献資料部事業報告

福田秀一

当部の主要事業である文献資料の調査・収集（撮影）は、少くともわが国の予算制度下では、農作業に似ている。毎年度初めに一定の計画を立て、その成果（調査・収集の点数）を年度内に挙げねばならないからである。一つの文庫に二年以上を充てるのは作物の連作と同じで、やはり成果は年度ごとに区切って出さねばならない。

この点が、農作業の建築業や造園業あるいは植木の手入れと違うところである。それらは、初めに大きな計画や手間が要るかもしれないが、一旦形が整ったら、常時保守・補修は要るにせよ、必ずしも毎年一定時期に種蒔き・植え付けや収穫の大騒ぎをしなくてもすむ。博物館の開設・運営などは、これに当ると言えよう。

すなわち農作業は不断の汗の労働であり、私共の場合には、年度計画に従事して下さった調査員各位の労力がそれに当る。またその収穫は大地や神の恵みによるが、われわれの場合には所蔵者・関係者各位の御好意がそれに相当する。

今回もまた、それらの方々の御協力・御支援に感謝しつつ、昨年四月から本年一月末までの調査・収集結果の報告から始める。但し文庫ごとの点数等は例によって「調査研究報告」に譲る。また年度末までには、点数ばかりでなく文庫名にも多少の追加が予想される。昭和六十年国文学文献資料調査・収集の概況

一、調査

現年度は、本年一月末までに左の八五箇所（予備調査Ⅱ*印を含む）の所蔵資料計六六一〇点を調査した。なお、予備調査として*印を付したものの以外にも、展示を見ての報告など、当館としてのいわば正式な調査の手続きによらないものもあるが、それぞれ情報として有益なので記録保存することとし、ここにも掲げておく。

北海道東北地区（順不同、敬称略一部略称、以下同じ）

弘前市立弘前図書館・盛岡市中央公民館・酒田市立光丘文庫・鶴岡市郷土資料館・光明寺

関東地区

文庫紹介⑦

酒田市立光丘文庫

みちのくの酒田の地は、古くより良港を擁して栄え、西鶴は「日本永代蔵」に大間屋鎧屋惣左衛門の繁栄を描き、芭蕉は奥の細道の旅に、象潟行を挿んで十数日、この地で玉志・不玉らと俳交を持つ。今も鎧屋、不玉宅跡の碑などの存する酒田市の西方、港を望む日和山公園に至る途中の丘の上に光丘文庫がある。近くの光丘神社は、当地所在の大地主として広く知られた本間家の三代光丘をまつるが、本文庫の名もこれにちなみ、図書館設立の想を立てていたという光丘の遺志を生かし、大正十二年に八代光弥氏の、建物敷地、家蔵書と維持基金十萬円の提供により光丘文庫の設立をみ、それを中核としてその後の集書を加えたものが、戦後三十三年に建物とともに市に寄附されて現在に至っているのである。

所蔵書のうち俳書については、

国文学研究資料館編の「酒田市立光丘文庫俳書解題」（明治書院発行）が出ており、庄内俳諧史をそのま

ま反映した集書という点に特色を認めている。文庫には三十三年移管当時の「光丘文庫旧蔵書架目録」があるが、多岐多方面にわたり、珍書稀本というよりは全体の一まとまりとして、近世の名望家・教養人の関心・蔵書傾向をうかがうものとしてまず興味をそそられる郷土関係の資料も豊富で、市の指定文化財の庄内藩士池田玄斎の随筆「弘業録」病間雑抄二百余冊他がある。印刷された展示目録に和歌・俳諧・物語小説（一・二）・芸術書・社会科学書関係の主なものが解説されており（現在残部なし）、近世の小説類も結構多い。資料館で数年収集した紙焼は閲覧可能で、現在調査続行中。なお文庫では新目録を作製中で、漢籍関係は六十年、和書関係は六十一年度発行予定とのことである。

（長谷川 強）

〒998 酒田市日吉町二一七七一
電話 〇二三四一二一〇五五二

彰考館・流通経済大学図書館(祭魚洞文庫)・大前神社・埼玉県立文書館・学習院大学国語国文学研究室・東京芸術大学附属図書館・東京大学国文学研究室・東京都立中央図書館(加賀文庫他)・永青文庫・東洋文庫・松本文庫・久松国男(当館寄託本)・政法大学能楽研究所(鴻山文庫)・宮内庁書陵部・神奈川県立金沢文庫*・大倉精神文化研究所*・横須賀市立図書館*中部地区

新潟大学附属図書館(佐野文庫)・上越市立高田図書館(榊原本)・富山県立図書館*・石川県立郷土資料館(大鋸コレクション)*・石川県立金沢泉ヶ丘高校*・勝山市史編纂資料室*・福井市歴史資料館(越葵文庫)・武生市役所(寄託本)・長野市教育委員会(真田文庫)・上田市立図書館(花月文庫)・角田光代・浜松市立賀茂真淵記念館*・愛知県立大学図書館(古俳書(-))・金城学院大学図書館・名古屋国立鶴舞中央図書館・同蓬左文庫(尾崎コレクション)・名古屋大学附属図書館(神宮皇学館文庫)・岐阜市立図書館加納分館*・石水博物館*・常住寺間魔堂・神宮文庫近畿地区

服部琢磨*・西教寺・伏見桃山城・陽明文庫・立命館大学図書館・舞鶴市立西図書館・園部町教育委員会(小出文庫)・大和文華館・不退寺・某寺(檀原市)・大方保・大橋正勝・茨木神社・東大阪市郷土博物館・国立文楽劇場・香具波志神社・大阪女子大学附属図書館・逸翁美術館・林田良平(蝸牛廬文庫)・堺市博物館・菅生神社・弘河寺西行記念館(西行コレクション)・西光寺・光徳寺・服部天神文庫*・温泉寺・篠山藩振徳版本館中国四国地区

岐阜神社・野坂宮司家・萩市立図書館・西円寺・村上家・多和文庫・松本真一・今治市河野信一記念文化館・大洲市立図書館*・小松町立公民館*・高知県立図書館(山内文庫)九州地区
祐徳稲荷神社・熊本県立図書館・臼杵市立臼杵図書館二、収集
本年一月末までに左の二三箇所
の所蔵資料計四三〇一点を収集した。
関東地区
矢口丹波記念文庫・麗沢大学図書館(田中文庫)・東京芸術大学附属

図書館・東洋文庫(紙焼写真)・学習院大学国語国文学研究室・政法大学能楽研究所(鴻山文庫)・松宇文庫中部地区

金沢市立図書館(稼堂文庫)・加賀市立図書館(聖藩文庫)・上田市立図書館(花月文庫他)・刈谷市立刈谷図書館(村上文庫)・金城学院大学図書館・新城市教育委員会(牧野文庫)・神宮文庫近畿地区

彦根市立図書館(琴堂文庫)・京都女子大学附属図書館(吉沢文庫)・陽明文庫・大阪女子大学附属図書館・大方保・温泉寺中国四国地区
多和文庫・今治市河野信一記念文化館・高知県立図書館(山内文庫)九州地区
熊本大学附属図書館(北岡文庫)・臼杵市立臼杵図書館海外資料の調査
一、国立台湾大学研究図書館(調査)
前号に述べたように、昨年九月から十月にかけて文部省海外学術調査科研究費で、国立台湾大学研究図書館の調査を行った。すなわち、当部から福田以下五名に鈴木孝庸

(新潟大)・井上敏幸(福岡女子大)両氏を加えた計七名が日程をずらしつつ各人二週間程度現地に滞在して、昨年二・三月の作業を受けて旧台北帝大国語国文学研究室本のリストアップ(両年度計二二五二点)を行い、余力をもって若干の貴重書の細目書誌をも調査した。その成果は六十一年度に行う予定の総括研究を経て、何らかの形で広く学界の役に立てたいと考えているが、再三応対して下さった台湾大学図書館長陳興夏教授、同研究図書館の主任(その後定年で退職された)曹永和氏ならびに呉傳財氏をはじめ、現地や関係方面の方々にあつく御礼申上げる。

二、(国立)ソウル大学校図書館(収集)

かねて当方が希望していた「万葉集抄」以下五五五のマイクロフィルムを先方が作って下さって、それが昨年度(五十九年度)末に届いたことは前号既報の通りであり、前号にはそれに対して謝礼の寄贈マイクロフィルムを先方の希望リストに従って作成中と記したが、実はその作成に少々手間がかかり、ようやく近日作業を終える見込である。(その後終了した)

第四室 第四室には、通年でお願

いしている早稲田大学の雲英末雄氏（前号参照）のほか、前期の鈴木孝庸氏に代って後期には名古屋大学の高橋亨氏を迎え、去る十月から半年間外国人研究員として当館に見えているオランダのフリッツ・フォス氏を中心とした共同研究（別項参照）に参加して頂く傍ら、彰考館で収集した平安物語日記文学作品を検討してその目録作成に資して頂いている。

地区会議等 予算（特に私どもの旅費）不足のため暫く見合せていた調査員地区会議を、昨年度（五十九年度）から復活させて毎年二地区程度行うこととし、昨年度は中四国（七月、今治市・近畿（十一月、大阪市）の両地区で有益な情報や御意見を頂くことができた。現年度は去る十一月に熊本で九州地区会議を開き、二月には仙台で北海道東北地区の会議を行う予定である。その際、一層有益な会議とするため、現任の調査員以外に地区の旧調査員など数名の方にも御出席頂くこととした。既にその方針で行った九州地区会議は、今後の事業計画の立案に甚だ有益で次に述べる件についても参考まで

に御意見を伺った。

それは、主として調査員の労力になる「調査カード」のことで、

それらは当館設立以来十余年の間に一〇万枚を超えている。従ってその保管と活用を至急に検討しなければならぬが、そのため現年度中に、現旧の収集計画委員・調査員（それは同時に当館の利用者でもある）の何人かの方々にお集り頂いて検討会を行うこととした。当面二回の検討会で一応の結果が出るものと考えており、第一回は昨年末に行ったが、具体的な御意見が出て大変有益であった。第二回は三月に行う予定である。因みに、現在でも調査カードは収集等日常の業務に活用しているほか、

その内用は（特に原資料所蔵者の特別の指示がない限り）、当館の利用者に（例えばマイクロ資料利用の参考として）参考室への質問要求に応じる形で公開（伝達）しており、死蔵しているわけではない。またその内容も時間的制約その他によって必ずしもすべて完璧とは言えないが、とにかく多量になったことでもあり、一層便利で有効な保存・活用法を考えようというのが前提である。（文献資料部長）

研究情報部事業報告

棚町知彌

情報室

情報室は、館報発行、新聞情報収集、国際日本文学研究集会開催の業務を行ったほか、臨時論文検索室の作業にも取り組んでいる。編集室

『国文学年鑑』（昭和五十八年）の編集を行なった。三月二十五日

至文堂より刊行。

当室では、昨年の五月から十一月にかけて半年間、室長の在外研修があったため、その間は部長が室の責任者を兼ねた。

情報処理室

(1) 既開発の情報処理システムの見直しと運用

ハードウェアシステムについては、ラインプリンタの機能拡張、マルチワークステーションの入替、光ディスクの導入及び端末装置の増設、一部端末のパーソナルステーションへの置換を行った。ソフトウェアについては、ハードウェア入替に伴う各種ソフトウェアの導入及び新しいオペレーティングシステムの導入を行った。これらハードウェア、ソフトウェア両面

で運用管理上の整備を行うことにより、オペレーションの省力化をはかった。

また、昨年度から懸案であった文字セット管理作業は、情報処理システム専門委員会が引続き審議中である。外字については昨年度未作成分も含めて106文字作成した。

(2) システム開発

以下60年度システム開発の状況を報告する。ただし光ディスクを用いた原文書情報処理、学術データベース統計処理、知識ベースを用いた検索システムなどの研究開発は含まない。

● 古曲籍総合目録作成システム

データベース上でデータの一貫性を保つための操作を行ったり、データベースから作業用リストを出力するシステムとして①著作構造ロガー②一冊本の双書構造変換③各種業務リスト作成を行い、現在定期的に書名、著者名のコントロールの作業が行われている。なお国書入力システムについては、前年度の詳細作業に引続き①国書原データ入力・検査②業務リスト

出力③国書原データから古典籍著作データへの形式変換④著作・著者典拠コントロール⑤運用システムの各システムを作成した。

●マイクロ資料目録作成システム
定常業務の他、本年度限りの作業として、累積版目録の作成を行った。また、オンライン検索システムの公開実験を行い、ユーザインタフェースなどについてユーザの意見を収集した。

●論文検索システム

臨時論文検索室とともに、蓄積されたデータの修正、新しいデータの入力のためのシステム運用、検索システム将来形態の検討を行った。

●文字セット管理システム

JISコード表及び新字源（角川書店）改訂のため、文字セット管理システムについて①文字属性ファイルの構造変更②管理プログラム群の変更③文字属性情報変更システム開発④文字属性変更作業等を行った。

整理閲覧部事業報告

本田康雄

当館で撮影・収集したマイクロフィルム量は、昭和四十七年五月の創設以来現在までにロールフ

行った。

●運用管理システム

計算機運営上の資源の一括管理を目的として①運用管理データ入力・検査②運用管理データ検索③運用管理データ編集・出力の各詳細設計及びシステム開発を行った。●和古書目録システム

昨年度までのバッチ処理の形態から業務担当者によるオンライン業務処理への移行及び目録情報のオンライン検索のためのシステム開発等を行った。

臨時論文検索室

六十年四月からスタートした臨時論文検索室は将来のオンラインサービスの向けて、国文学年鑑に掲載された過去の論文データの整理を行っている。四月発足時には補佐員一名であったが、幸に九月から二名に増加されたので、前号で報告したように未着手となっていた昭和五十六年以降のデータの入力も開始した。（研究情報部長）

イルム形態のもので一万五千ロールをこえている。当館ではこれらのフィルムを永久保存用としてい

るが、これまで空調設備の完備した専用の保管施設がないために、マイクロフィルムキャビネットに収納して書庫で保存してきた。フィルムの保存条件を良くするため、また、収納スペースの不足を解消するために、専用の保管施設ができるまでの間、保存環境、条件の良い外部の施設に保管を委託することを検討、要求してきたところ、その予算が認められ、今年度から保存用ネガフィルムの外部保管委託を開始することとなり、七月に昭和四十六・五十五年度収集分の保存用ネガフィルム八、六四九リールについて外部保管委託を実施した。これにともない、十月には「寄託保管契約監査実施要領」が制定された。十一月に実施された監査に際しては、この監査実施要領に基き検査員を派遣し、寄託したフィルムの保管状況等を検査した。

この他、当部が担当する業務（資料の受入、整理、保存、利用サービス、及び参考業務、公開講演会の開催、展示等）は順調に進展した。

(一)整理閲覧室

以下に各業務毎に報告する。

(1)受入業務

六十年十二月末における今年度の資料受入数は、マイクロ資料八二九リール、図書一、六五一冊、逐次刊行物約四、二二五巻号冊であった。

(2)古典籍総合目録作成事業

データベースに登録済のデータをもとに、典拠コントロールテストを行った。この結果、書誌データ七三九件について著作のとりまとめがされる一方、著作データ二、一二七件について著者のとりまとめがされ、併せてシステム運用の手順が把握された。現在、書誌データ約六千件及び著作データ約四千五百件について、次のコントロールにとりかかっている。また、並行して約八千件の書誌データを新たに作成した。

(3)整理業務

「マイクロ資料目録一九八五年」は、データの作成、入力を終え、項目校正作業が進行中である。本目録には、法政大学能楽研究所（鴻山文庫）、九州大学附属図書館（支子文庫）他二五文庫、八、〇二五点が収録される。

古典作品典拠ファイル作成事業は、データ作成、システム開発と

もに順調である。データ作成については、前年度分約三万六千件の校正を完了、今年度分約二万八千件をパンチ外注し、校正作業を進めている。システム開発は、形式変換を行うための前処理システムが完成し、テストを兼ねて実際のデータの処理を実行しつつある。

前年度諸般の事情から見送った和古書目録は、既存システムに若干の改変を加え、年度内に刊行すべく、データ作成とシステムの運用を行っている。収録書目数は二七六件である。

新刊書整理、和古書補修、帙作成等は例年通りに進行している。

(4) 閲覧業務

昭和六十年下半期(七月～十二月)は、入室者数が五、五五七人(一日平均三九人)、文献複写が一、〇〇六件(一日平均八三件)、また相互利用の申込受付が五五二件であった。これを前年同期と比較すると、入室者数が四％増、文献複写が一〇％増、相互利用が一四％増となっている。利用者増加の傾向は、いぜんとして続いており、サービス低下の問題が生じ、その対応に苦慮していたが、七月からカウンター要員として、非常

勤職員二名の配置が実現した。

これまでも、サービス体制の整備、改善のため、種々の方策を講じてきたが、今後もサービス向上のために努力していきたい。

(5) マイクロ室業務

富山大学附属図書館(ヘルン文庫)他二三文庫、七四〇リールの作業用ネガフィルムを作製した。閲覧用ポジフィルムは、大和文華館、岐阜市立図書館等四四三リールを作製し五十八年度収集分の加工を終了した。紙焼写真本は、二、一〇〇冊の製本、装備を行った。

(二) 参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

国文学の普及活動として、次のとおり公開講演会・展示を開催した。

●第8回夏期公開講演会「近世の日記・記録」

(7月25日～27日、於当館。講演集刊行の予定)

25日 「芸能の記録——松平大和守日記・宴遊日記・家乗——」

鳥越文蔵(早稲田大学教授)、「老後のいきかた——鎌堂日歴——

梅谷文夫(二橋大学教授)。

26日 「見世物興行・大道芸——猿猴庵日記・鸚鵡籠中記——

延廣真治(東京大学助教授)、「の噂——よしの草子・藤岡屋日記——」吉原健一郎(成城大学助教授)。

27日 「戯作者の生活——馬琴日記——」柴田光彦(跡見学園女子大学教授)、「町名主の文化生活——斎藤月峯日記——」西山松之助(東京教育大学名誉教授)。

●第23回公開講演会(10月26日、於金沢市・石川県社会福祉会館中ホール)笠舞と加賀踊と」室木彌太郎(仁愛女子短期大学教授)、「能と狂言」小山弘志(国文学研究資料館長)。

●第15回特別展示「新収資料展——昭和57～59年度期——」(11月1日～15日。「国文学研究資料館特別展示目録9」を刊行)

●常設展示

第28回「名所と文学」(7月1日～9月21日)

第29回「上代の文学」(10月1日～24日および11月20日～12月26日)

(整理閲覧部長)

委員会日誌

昭和六十年

11月8日

国際日本文学研究

委員会(第三回)

11月15日

国文学文献資料調査

委員会(九州地区)

12月3日

共同研究委員会(第

二回)

昭和六十一年

1月16日

国文学文献資料収集

計画委員会(第二回)

2月7日

共同研究委員会(第

三回)

2月20日

国文学文献資料調査

委員会(東北地区)

3月11日

情報処理システム運

用委員会(第二回)

3月18日

古典籍総合目録委員

会(第一回)

3月18日

文献目録委員会(第

二回)

運営協議員会議の開催について

本年度第二回運営協議員会議が十一月二十八日(木)に当館中会議室において小山議長ほか十七名の出席を得て開催され、議事は、当館における当面の諸問題について現状説明が行われ、それに対して協議が行われた。

本年度第三回運営協議員会議が

三月六日(木)に当館中会議室において小山議長ほか十五名の出席を得て開催され、議事は、管理運営の概況、昭和六十一年度事業計画及び昭和六十一年度予算内示等について協議が行われた。

評議員会議の開催について

本年度第二回評議員会議が三月十四日(金)に当館中会議室において阿部議長ほか十三名の出席を得て開催され、議事は、管理運営の概況、昭和六十一年度事業計画及び昭和六十一年度予算内示等について協議が行われた。

外国人研究員

フリッツ・フォース

オランダ王国 ライデン大学名

誉教授

研究題目 平安時代の文学

期間 昭和60年10月7日～昭和61年3月31日

昭和60年度国際研究集会派遣研究員

小山弘志
会議名 第四回ヨーロッパ日本研究会議

期間 昭和60年9月18日～昭和60年10月1日

大学院受託学生

佐藤マサ子

所属 お茶の水女子大学人間

文化研究科比較文化学専攻

期間 昭和60年4月1日～昭和61年3月31日

研究題目 カール・フローレンツの日本研究の研究

史上に於ける意義

文部省在外研究員

百川敏仁

渡航先 ブリテイッシュコロニア大学

目的 ①「日本文学における異界」をテーマとする比較文学的研究

②カナダにおける日本文学研究の現状の調査

期間 昭和60年5月15日～昭和60年11月15日

私学研修員

加納重文

現職 京都女子大学短期大学部助教授

研究題目 歴史物語の書誌的研究

期間 昭和60年4月1日～昭和61年3月31日

湯沢賢之助

現職 跡見学園短期大学教授

研究題目 井原西鶴の周辺の作家・作品の研究

期間 昭和60年4月1日～昭和61年3月31日

内地研究員

中村一基

現職 岩手大学教育学部講師

研究題目 本居宣長とその門流の研究

期間 昭和60年9月1日～昭和61年2月28日(6カ月)

公立大学研修員

竹村信治

現職 金沢美術工芸大学講師

研究題目 ①「今物語」諸伝本調査及び関連資料蒐集

②説話を中心とする院政期・中世初期文学の研究

期間 昭和60年10月1日～昭和61年3月31日

海外出張等

研修旅行

森 安彦

渡航先 スペイン・ポルトガル西ドイツ

目的 第16回国際歴史学会議出席

席 他

期間 昭和60年8月15日～9月2日

安澤秀一

渡航先 イタリア

目的 企業史料の評価と科学的

研究に関する史料館国際

評議会ICA・企業史料

委員会会議フローレンス

出席 昭和60年9月26日～10月13日

岡 雅彦

渡航先 アメリカ合衆国

目的 カリフォルニア大学バー

クレイ校所蔵の旧三井文庫本の調査整理

期間 昭和60年9月23日～昭和61年9月22日

田嶋一夫

渡航先 中華人民共和国

目的 中国科学院計算センターにおける講演ならびに指導

期間 昭和60年10月29日～昭和60年11月18日

人事異動(昭和六十一年九月～昭和六十一年三月)

(併任)昭和六十一年十月一日～昭和六十一年三月三十一日

文部教官(文献資料部助教授)高橋 亨(名古屋大学助教授)

昭和60年度科学研究費補助金(第二次分)

安澤秀一

総合研究(A)

研究課題 近世・近代史料所在

情報の収集及びその体系

化に関する基礎的研究

利用者へのお知らせ

◆所蔵目録刊行の御案内

このたび「マイクロ資料目録」「和古書目録」逐次刊行物目録」の最新版が刊行されましたので御案内いたします。

(1)「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八五年」(第九冊)

この目録には、二五所蔵者(文庫)分、八、〇二五点が収録されています。そのうち一四所蔵者(文庫)が、今回初めて収録されるものです。

収録所蔵者(文庫)は次のとおりです(*印は新規収録分)。

- 文庫 No. 所 蔵 者
- 20 宮内庁書陵部
 - 25 東京都立中央図書館
 - 32 水府明德会彰考館
 - 48 名古屋市蓬左文庫
 - 55 陽明文庫
 - 73 今治市河野信一記念文化館
 - 80 愛知教育大学附属図書館
 - 208 青森県立図書館(工藤文庫)
 - 209 富山県立図書館(志田文庫)
 - 213 The British Library
 - 221 岐阜県立図書館
 - 238 * 法政大学能楽研究所(鴻山

文庫)

- 239 * 千葉県立佐倉高等学校(鹿山文庫)

- 242 * 京都女子大学図書館(吉沢文庫)

- 244 * 大阪女子大学附属図書館

- 245 * 山口県文書館

- 246 * 佐賀大学附属図書館(鍋島文庫)

- 247 * 船橋市西図書館

- 248 * 国学院大学図書館

- 250 * 九州大学附属図書館(支子文庫)

- 255 * 新城市教育委員会(牧野文庫)

- 260 * 東京都立中央図書館(東京誌料)

- オ4 * 大喜多勤学
- カ3 * 歎喜光寺
- ヒ1 * 久松国男

(2)「国文学研究資料館蔵和古書目録増加3(一九八四—一九八五)」

この目録は、昭和五十九年三月刊行の「和古書目録増加2(一九八三)」に続く、増加分の第三冊目です。昭和五十九年、六十年の二年間に収集した和古書(写本・版本二七六点が収録されています。

(3)「国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録一九八六年」

収録誌数は、前年分より一四四誌増え、三、〇三五タイトルで、昨年十一月末までの受入れ分が収録されています。それ以降の受入れ分については、カウンターで係員におたずねください。

◆マイクロ資料目録の市販について

「国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八四年(縮刷版)」(第八冊)が笠間書院より刊行され市販されています(定価六、五〇〇円)。既刊七冊とあわせて御利用ください。

◆徳島県立図書館資料の複写サービスについて

これまで徳島県立図書館(森文庫・木下眉城文庫・阿波国文庫)のマイクロ資料のサービス区分は「E」(複写不可、館内閲覧のみ)でしたが、このたび徳島県立図書館(岩佐健二館長)の格別の御配慮により、今後は利用者への複写サービスを許可する旨の回答をい

ただき、サービス区分「A」に変更になりました。これによって、紙焼写真、ポジフィルム作製の複写サービスができるようになります。なお、これに該当する徳島県立図書館の資料は、木下眉城文庫・阿波国文庫が「マイクロ資料目録一九八〇年」(第四冊)、森文庫が「同一九八一年」(第五冊)に収録されています。どうぞ御利用ください。

◆休室日の変更について

前号でお知らせしましたように「国文学研究資料館資料利用規程」の改正に伴い、四月末から五月上旬にかけての五日間(四月三十日・五月四日、従来は四日間)が、資料くん蒸のため休室日となりました。なお、その他の休室日については、いまままでとおりです。

◆新指定貴重書

このたび次の資料が新たに貴重書に指定されました。これによって当館の貴重書は、計六十三点となりました。

『吉野一覽記』(写)

昭和六十一年度春季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加

する学会の春季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。

以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

解釈学会 ①一七〇豊島区北大

塚三二九一教育出版センタ

一内

近代語学会 ①一〇六新宿区北

新宿三一〇一〇一五〇七

国語学会 ①一〇一〇千代田区神

田錦町三一〇一〇武蔵野学院気付

②五月二四一〇二五〇〇東洋大学

古事記学会 ①一〇五渋谷区東

四一〇一〇二八国学院大学文学

部日本文学第二研究室②六月二

一〇二二〇〇明治大学百周年記

念館

古代文学会 ①一六四中野区中

野五一九一六二〇五西條

勉方

上代文学会 ①一六〇新宿区西

早稲田一六〇一早稲田大学教

育学部国文学研究室内②五月一

〇〇一〇二二〇〇熊本女子大学

説話文学会 ①一五四世田谷区

駒沢一〇二二一駒沢大学文学

部国文学研究室内②六月一五日

③駒沢大学

全国大学国語国文学会 ①一〇

一〇代田区猿樂町二一八一三

桜楓社気付②五月二四一〇二五

③二松学舎大学

中古文学会 ①一七一豊島区目

白一一五一一学習院大学国語国

文学研究室内②五月一七一八

日③鶴見大学

中世文学会 ①一六〇新宿区西

早稲田一六〇一早稲田大学教

育学部梶原研究室②五月二四

一〇二六〇〇早稲田大学

日本演劇学会 ①一六〇新宿区

西早稲田一六〇一早稲田大学

演劇博物館内②五月一七日③武

蔵野美術大学

日本歌謡学会 ①一五〇渋谷区

東四一〇一〇二八国学院大学文

学部第七研究室内

日本近世文学会 ①一六二新宿

区戸山一一二四一〇一早稲田大学

文学部神保五彌研究室内

日本近代文学会 ①一九二一〇

三八王子市東中野七四二一中

央大学文学部国文学研究室②五

月二四一〇二五〇〇中央大学多摩

校舎

日本口承文学会 ①一六〇新

宿区西新宿八一四一五財団法人

ラポ国際交流センター広報部気

付②六月七一〇八日③若手県遠野

市

日本文学協会 ①一七〇豊島区

南大塚二一七一〇〇②六月二

八日③学習院大学

日本文学風土学会 ①二二四四

崎市多摩区東三田二一〇一専

修大学文学部国文学研究室内②

五月三二日③専修大学神田校舎

日本文芸研究会 ①一九八〇仙台

市川内東北大学文学部内②六月

七一八日③東北大学文学部

俳文学会 ①一六〇五京都市東山

区東山七条京都女子大学文学部

浜千代研究室内

表現学会 ①一四八〇一一愛知

県愛知郡長久手町愛知淑徳大学

国文学科研究室内②五月二四一

二五〇〇福島大学

仏教文学会 ①一〇二〇千代田区

三番町六番地二松学舎大学(東

部)一六〇〇京都市下京区七条

四日③二松学舎大学

万葉学会 ①一五五五吹田市千里

山東三関西大学国文学研究室内

美夫君志会 ①一四六六名古屋

昭和区八事本町一〇一中京大学

文学部国文学研究室内

和歌文学会 ①一三三九一文

京区本郷郵便局私書箱第二八号

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料(切手)を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報 第二十六号

昭和六十一年三月発行

編集・発行者

国文学研究資料館

東京都品川区豊町一六二〇

郵便番号一四二

電話(七八五)七三二一(代)

印刷所 株式会社 三興

昭和六十年度共同研究

館報二四号所収公算提出課題以外

(一)「久松義」の解題研究

稲田利穂 (岡山大学教育学部助教授)

稲田秀一 (当館教授)

(二)落窪物語の研究

フリッツ・フォス (当館客員教授)

(ライデン大学名誉教授)

小峯和明 (当館助教授)

高橋 亨 (当館客員・名古屋大学文学部助教授)

稲田秀一 (当館教授)

松本隆信 (慶應義塾大学文学部教授)

三角洋一 (東京大学教育学部助教授)

百川敏仁 (当館助教授)

吉河直人 (当館助手)

昭和六十一年度共同研究

(一)中世歌合の研究

井上宗雄 (立教大学文学部教授)

稲田秀一 (当館教授)

佐藤恒雄 (香川大学教育学部教授)

紙 宏行 (文教大学女子短期大学部専任講師)

兼築信行 (早稲田大学高等学院教諭)

山田洋扇 (立教高等学校非常勤講師)

今井 明 (早稲田大学大学院博士課程)

湯浅忠夫 (学習院大学大学院博士課程)

(二)江戸狂歌本の研究

浜田義一郎 (大妻女子大学名誉教授)

石川俊一郎 (慶應義塾高等学校非常勤講師)

石川 丁 (大妻女子大学文学部助教授)

宇田敏彦 (戸板女子短期大学教授)

阿 雅彦 (当館助教授)

小野尚志 (当館助手)

柏谷宏紀 (日本大学文理学部教授)

延廣貞治 (東京大学教育学部助教授)

(三)本朝文粹における願文の研究

渡辺秀夫 (信州大学文学部助教授)

小峯和明 (当館助教授)

山崎 誠 (広島女子大学文学部助教授)

森 正人 (熊本大学文学部助教授)

佐藤道生 (慶應義塾大学大学院博士課程)

(四)江戸時代堂上和歌聞書の研究

嶋中道則 (東京学芸大学助教授)

市古夏生 (白百合女子大学文学部助教授)

川俣 高 (成蹊大学文学部教授)

島原幸雄 (当館助手)

清水素子

鈴木健一 (東京大学大学院博士課程)

鈴木 博 (国学院大学日本文化研究所助教授)

林 達也 (駒澤大学文学部教授)

坂内泰子 (東京大学大学院博士課程)

和田道子 (日本学術振興会特別研究員)

古相正英 (国学院大学日本文化研究所嘱託研究員)

(五)三十六人集諸本の研究

平田昌国 (横浜国立大学教育学部教授)

新藤徳三 (当館助教授)

藤田洋治 (鶴岡工業高等専門学校講師)

加藤幸一 (筑波大学大学院博士課程)

田辺俊一郎 (大東文化大学大学院博士課程)

(六)日本文学の特質

外国人研究員ほか